

【研究ノート】

奈免羅遺跡 SX3003出土副葬水晶製玉類について

平郡達哉*・建神結香子**

(*島根大学法文学部、**松江市文化スポーツ部)

摘 要

本稿では、弥生時代西日本における副葬水晶製玉類のうち、鳥取県八頭町奈免羅遺跡 SX3003から出土した水晶製玉類について、その年代的な位置づけと製作地に関する検討を行った。その結果、前稿で示した型式分類への比定と製作技法から後期前半の所産である可能性を提示し、水晶製玉類の法量、穿孔方法から青谷上寺地遺跡を製作地と想定した。このことから奈免羅遺跡 SX3003出土の水晶製玉類は弥生時代後期前半における水晶製玉類の製作と流通網の存在の一端を明らかにできる資料といえる。

キーワード：弥生時代、鳥取県東部、奈免羅遺跡、副葬、水晶製玉類、流通

はじめに

弥生時代墓制における副葬行為・副葬品のひとつに水晶を材料にした玉類がある。これら水晶製玉類は弥生時代中期中葉に北部九州で初現し、後期以降西日本を中心に墓への副葬品として使用された。前稿(平郡・建神2020)において弥生時代西日本における副葬水晶製玉類に対する基礎的な検討を行ったが、筆者らの集成漏れによって鳥取県八頭町の奈免羅遺跡から出土した水晶製玉類について扱うことができなかった¹。

本稿では、奈免羅遺跡出土の水晶製玉類に対する実見を通して得られた知見を基に、本資料の年代的な位置づけなどを行うと共に、山陰地域における水晶製玉類とその生産と流通について検討を加える。

1. 奈免羅遺跡における埋葬遺構について

(1) 奈免羅遺跡に対する調査現況

奈免羅遺跡は鳥取県東部、八頭郡八頭町を流れる八東川の左岸に位置する。八東川は鳥取・兵庫県境にある戸倉峠から発源し北東に流れ、八頭町と鳥取市の境界付近で千代川と合流し日本海へと流れ込む河川である。遺跡は千代川との合流地点から東へ4kmほど離れた地点の河岸段丘上に立地し、ここから日本海側海岸線までは約15kmの距離を測る。遺跡の性格としては縄文時代から古墳時代にいたる複合遺跡となる(八頭町教委・島田組2010)。

4次にわたる調査によって弥生時代の竪穴建物址、掘立柱建物址、溝、土壌が検出されており、集落は中期中葉に形成されはじめる(八頭町教育委員会・株式会社アコード2012、湯村

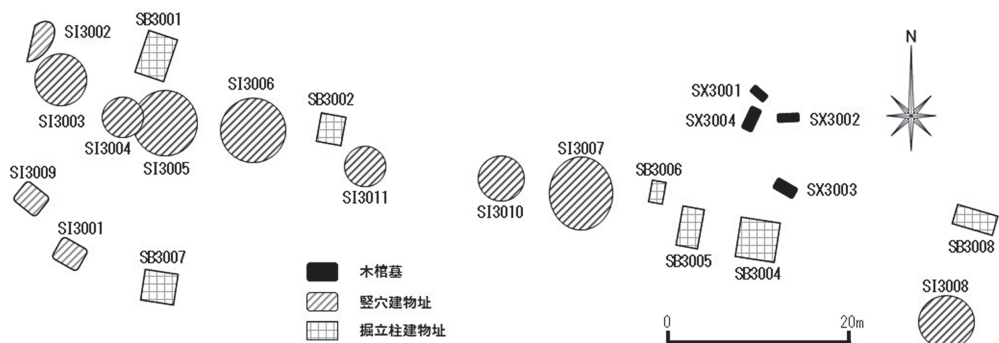


図1. 奈免羅遺跡3区遺構配置図(八頭町教委・島田組2010を基に筆者作成)

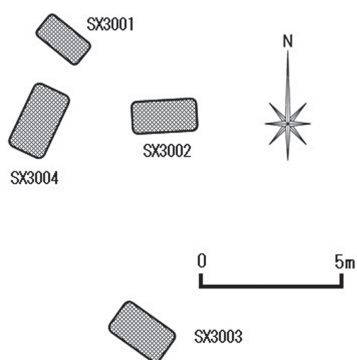


図2. 奈免羅遺跡埋葬遺構配置図(八頭町教委・島田組2010を基に筆者作成)

2017)。その後の後期前葉・中葉は竪穴建物址の数が少ない。しかし、後期後葉には居住区域を区画するような大溝が掘削され、竪穴建物址内からは北近畿系土器が出土する(湯村2017)。第3区第2面・第3面では15棟の竪穴建物址が調査されており(図1)、これらの時期については「中期後葉前後」としており、これら竪穴建物址と同一面で木棺墓が4基(SX3001～SX3004)確認された(図2)。

(2) 奈免羅遺跡の弥生時代埋葬遺構と出土品について

奈免羅遺跡における弥生時代墓域は現状では8m四方の中のごく限られた地点で確認されている。また、埋葬遺構間の関係については各遺構の主軸は各々異なっており、分布上、水晶製玉類が出土したSX3003のみが他の3基とは5mほど築造されている点以外には、列状配置などの規則性は見出しがたいが、4基とも木棺という埋葬施設を有する点で共通性が見られる。

墓域の規模を見ると表1のように遺構ごとにばらつきがある。遺構の残りが良好でない点も考慮する必要があるが、埋葬施設の構造において明確な違いは見出しがたい。副葬品については遺構の削平が激しい点を考慮する必要があるが、SX3001・3002・3004では遺構内からの出土品は無く、本稿で扱うSX3003でのみ確認されている。SX3003は残存状態が良好では無く、

墓域の底部が10～15cmほどが残っている。棺構築材として石材が見られない点と細長方形の土壙形態から木棺墓と報告されている²⁾。

SX3003の床面からは副葬品は出土していないが、木棺

表1. 奈免羅遺跡木棺墓一覧

	長辺	短辺	深さ	棺構造	掘方	断面
SX3001	1.866	0.928	0.101	短冊形の木棺痕跡	隅丸長方形	盤形
SX3002	2.287	1.085	0.125	短冊形の木棺痕跡	隅丸長方形	盤形
SX3003	2.415	1.41	0.139	短冊形の木棺痕跡	隅丸長方形	盤形
SX3004	2.605	1.326	0.074		隅丸長方形	盤形

数値の単位はm

奈免羅遺跡 SX3003出土副葬水晶製玉類について

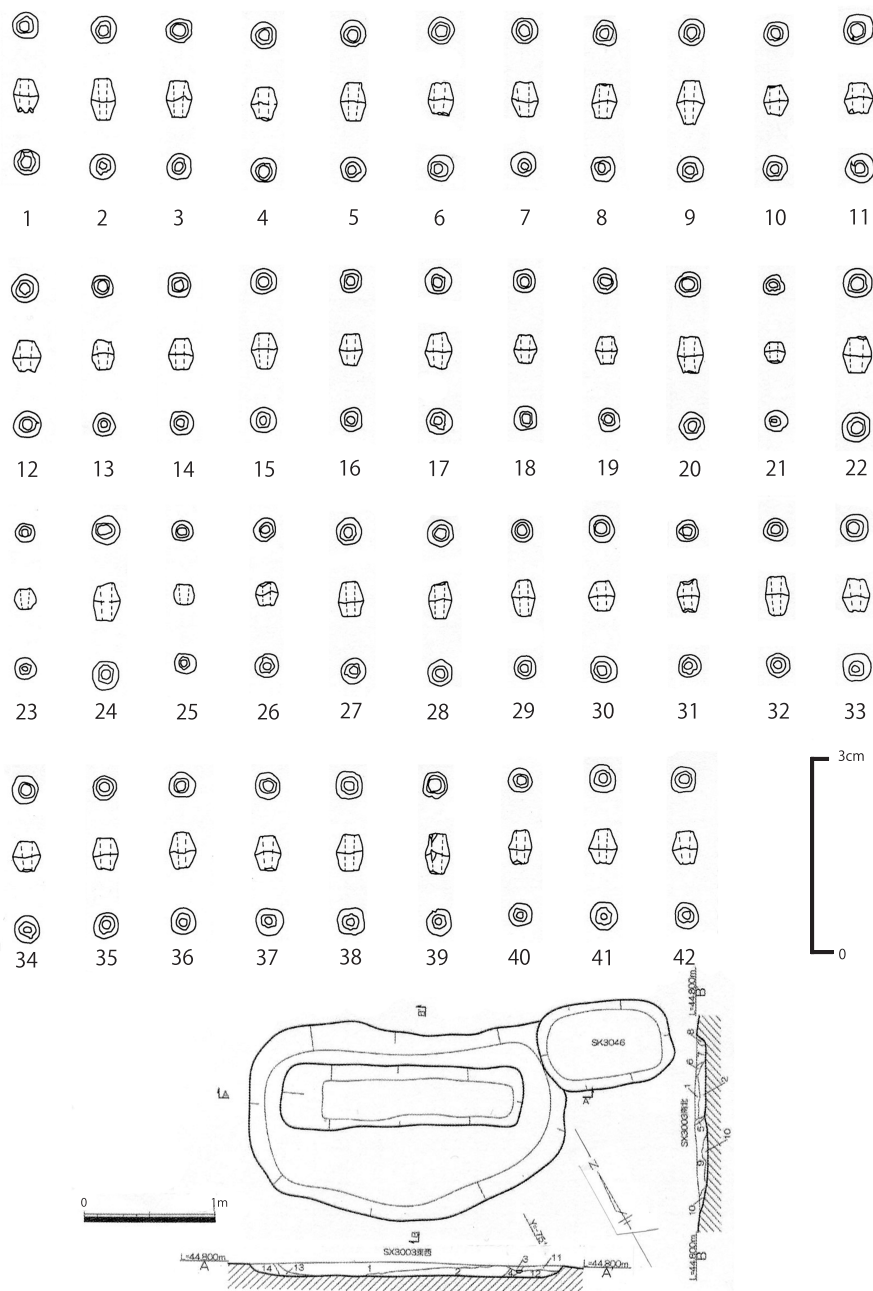
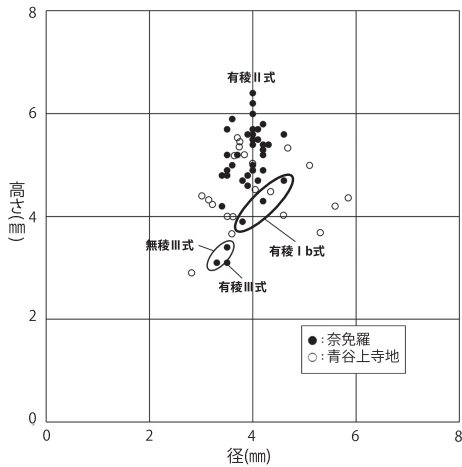


図3. 奈免羅遺跡 SX3003と出土水晶製玉類（報告書から引用・加筆、玉類は再トレース）

内埋土を採取し水洗選別する過程で水晶製玉類が42点確認された（図3・表2・グラフ1）。水洗選別の際、木棺部内の埋土を4分割しており、北東・南東側の埋土から確認されたことから被葬者は東に頭を向け、水晶製玉類は首飾りとして使用された可能性が指摘されている（八頭町教委・島田組2010）。このような水晶製玉類のみの副葬は、前稿で示した副葬様相の第4様相、つまり「水晶のみの連珠」にあたり、他に太田原高州遺跡の事例がある（図4-1）。



グラフ1. 奈免羅遺跡出土副葬水晶製玉類の法量と型式

4基の木棺墓の時期については、副葬品がSX3003出土の水晶製玉類のみであることから詳細な時期提示は困難であり「弥生時代後期以降」と報告されている(八頭町教委・島田組2010)。また、水晶製玉類が出土したSX3003は遺構の東南端をSK3046によって切られているが、この遺構からは弥生土器の細片のみが出土しており詳細な時期特定はされていない。

表2. 奈免羅遺跡 SX3003出土水晶製玉類の法量
(八頭町教委・島田組2010を基に加筆作成)

遺物番号	径	高さ	前稿での型式	遺物番号	径	高さ	前稿での型式
1	4	4.9	有稜Ⅱ式	22	4.6	5.6	有稜Ⅱ式
2	4	6.4	有稜Ⅱ式	23	3.3	3.1	無稜Ⅲ式
3	4	5.7	有稜Ⅱ式	24	4.2	5.8	有稜Ⅱ式
4	4	5	有稜Ⅱ式	25	3.5	3.4	無稜Ⅲ式
5	3.9	5.6	有稜Ⅱ式	26	3.8	3.9	有稜Ⅰb式
6	4	4.9	有稜Ⅱ式	27	4	5.5	有稜Ⅱ式
7	4	5.4	有稜Ⅱ式	28	4	5.5	有稜Ⅱ式
8	3.6	5	有稜Ⅱ式	29	3.5	5.7	有稜Ⅱ式
9	4	6.2	有稜Ⅱ式	30	4.1	4.7	有稜Ⅱ式
10	3.9	4.6	有稜Ⅱ式	31	3.5	4.9	有稜Ⅱ式
11	4.6	4.7	有稜Ⅰb式	32	3.6	5.9	有稜Ⅱ式
12	4.2	4.3	有稜Ⅰb式	33	4.2	5.2	有稜Ⅱ式
13	3.4	4.8	有稜Ⅱ式	34	4.2	4.9	有稜Ⅱ式
14	3.9	4.8	有稜Ⅱ式	35	4	5	有稜Ⅱ式
15	4.1	5.5	有稜Ⅱ式	36	4	5.6	有稜Ⅱ式
16	3.5	4.8	有稜Ⅱ式	37	4.3	5.4	有稜Ⅱ式
17	4.2	5.3	有稜Ⅱ式	38	4.2	5.3	有稜Ⅱ式
18	3.8	4.7	有稜Ⅱ式	39	4	6	有稜Ⅱ式
19	3.4	4.2	有稜Ⅱ式	40	3.5	5.2	有稜Ⅱ式
20	4.1	5.7	有稜Ⅱ式	41	4.2	5.4	有稜Ⅱ式
21	3.5	3.1	有稜Ⅲ式	42	3.7	5.2	有稜Ⅱ式

* 遺物番号は報告書掲載の番号に対応、数値の単位はmm

2. 奈免羅遺跡 SX3003出土水晶製玉類に対する検討

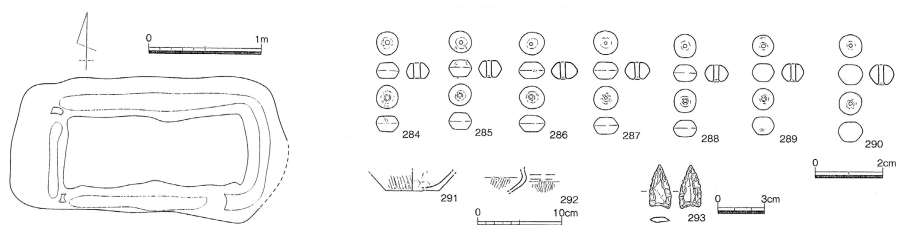
(1) 奈免羅遺跡 SX3003出土水晶製玉類の時期について

ここではSX3003から出土した水晶製玉類について実見の結果を基に既存に設定した型式³との関係、副葬時期について検討する。

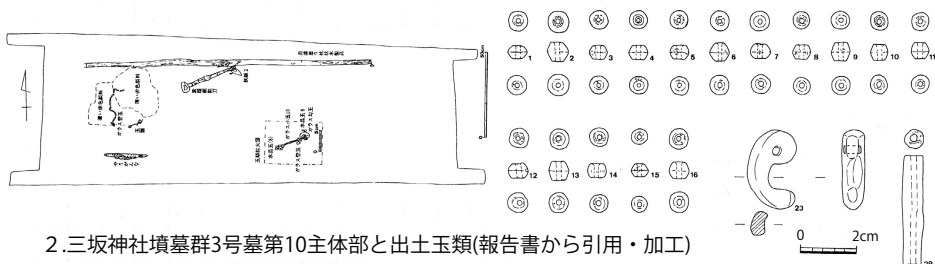
上述したように、奈免羅遺跡 SX3003では42点の水晶製玉類が出土している。これら水晶製玉類は前稿での型式分類⁴を用いると、4つの型式(有稜Ⅱ式、有稜Ⅰb式、有稜Ⅲ式、無稜Ⅲ式)がセットをなして存在することになる。

42点のうち、36点は従来算盤玉と呼ばれたもので縦長の有稜Ⅱ式になる。法量は最大径3.4~4.6mm、高さ4.2~6.4mmの範疇に収まるが、その中でも径は4mmを中心に、高さは4.6~6mmの法量を持つものが多く、他の型式に比べ規格性が高いと言えよう。

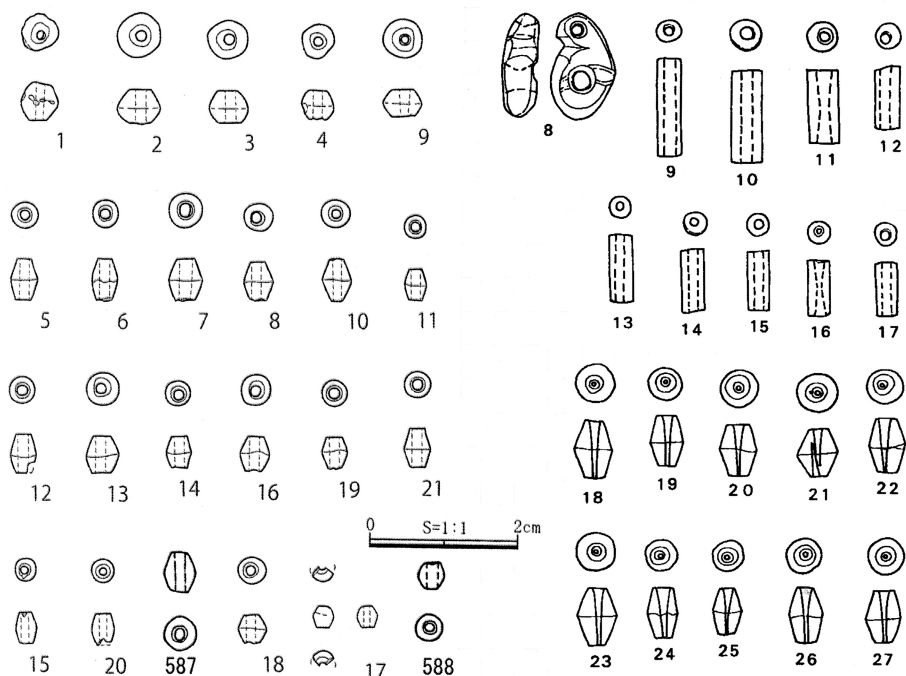
残りの6点のうち3点は算盤玉で縦横の比率が類似する有稜Ⅰb式(図3-11・12・26)である。法量は最大径3.8~4.6mm、高さ3.9~4.7mmの範疇に収まる。1点は算盤玉で横長の有稜Ⅲ式(図3-21)で、法量は最大径3.5mm、高さ3.1mmを測り、無稜Ⅲ式の法量に近い。2点は従来、丸



1. 太田原高洲遺跡主体部2-1と出土水晶製玉類(報告書から引用・加工)



2. 三坂神社墳墓群3号墓第10主体部と出土玉類(報告書から引用・加工)



3. 青谷上寺地遺跡水晶製玉類(完成品)(平郡・建神2020)

*番号 1～2 1(鳥取県2020)、587・588(鳥取県埋蔵文化財センター2013)は報告書掲載番号

4. 汐井掛遺跡D115号墓出土玉類(報告書から引用・加工)

図4. 奈免羅遺跡出土水晶製玉類の関連比較資料(各報告書から引用・加工加筆)

玉と呼ばれている無稜Ⅲ式(図3-23・25)で、法量は最大径3.3~3.5mm、高さ3.1~3.4mmを測る。

次に、SX3003出土水晶製玉類の时期的位置付けについて型式および製作技法から検討してみる。SX3003が検出された奈免羅遺跡3区では中期中葉・後葉の土器が出土(八頭町教委・島田組2010)しているが、先述したように埋葬遺構に伴う土器は発見されておらず、共伴遺物か

らの時期比定は困難である。したがって、水晶製玉類の型式から時期を比定せざるを得ないが、SX3003出土の水晶製玉類は有稜Ⅱ式、有稜Ⅲ式、有稜Ⅰb式、無稜Ⅲ式で構成されており、これらは後期以降に見られるものである(平郡・建神2020)。また、穿孔に石針を用いており、後述するように法量は異なるものの形態的に類似する太田原高州遺跡や三坂神社3号墓出土の水晶製玉類(図4-2)との比較から後期前半である可能性を指摘できる。

(2) 奈免羅遺跡 SX3003出土水晶製玉類と生産遺跡との関連性について

ここでは奈免羅遺跡 SX3003から出土した水晶製玉類の製作地について検討してみる。京都府奈具岡遺跡(中期後半)をはじめ、日本海沿岸地域、特に山陰地域では弥生時代の水晶製玉類製作工房と推定される住居址が複数の遺跡で確認されている。代表的なものとしては、鳥取県の北栄町西高江遺跡(中期後葉)、鳥取市青谷上寺地遺跡(中期後葉～後期後葉)、東伯町久蔵峰北遺跡(後期後葉)、琴浦町笠見第3遺跡(後期後葉)、島根県松江市平所遺跡(後期末)が挙げられる(高橋2002、鳥取県埋蔵文化財センター2013)。

これら生産遺跡のうち、どのような型式の水晶製玉類が製作されていたか推定できるのは縦長の小玉生産が主をなす奈具岡遺跡(野島・河野2001、河野・野島2003)、切子玉と最大径が高さよりも大きい形態の算盤玉の生産が想定されている平所遺跡(松本・三宅1977)、そして完成品が出土した青谷上寺地遺跡である。

特に、青谷上寺地遺跡第17次調査の包含層、土壌、ピット埋土の水洗等によって水晶製玉類の原石や四角柱状材と共に完成品が21点⁵出土している(鳥取県2020)(図4-3)。これらの水晶製玉類を見てみると、有稜Ⅱ式12点(図4-3の5～8・10～21)、有稜Ⅲ式5点(図4-3の1～4・9)、無稜Ⅱ式2点(図4-3の15・20)、無稜Ⅲ式1点(図4-3の17)、有稜Ⅰb式1点(図4-3の18)、穿孔には石針を用いている。法量は「長さ3.66～4.40mm、径2.94～3.62mm」のグループと「長さ4.52～5.53mm、径3.64～4.68mm」と大きく2つグループに分けられる(鳥取県2020)とするが、詳しく整理してみると表3の通りである。

両者の法量が完全に一致するという事は無いが、特に奈免羅遺跡で主をなす有稜Ⅱ式の場合、他の型式に比べ法量の重複が見て取れる。そして、石針穿孔という点において共通している。また、青谷上寺地遺跡では完成品以外に素材となる原石や四角柱状材が出土しており、水晶製玉類の生産供給を担う遺跡としての性格を想定している(平郡・建神2020)。上記したような型式、法量、穿孔技法の共通性から奈免羅遺跡 SX3003出土の水晶製玉類は青谷上寺地遺跡で製作された可能性が高い⁶。少なくとも、弥生時代後期前半以降副葬される有稜Ⅱ式と有

表3. 奈免羅遺跡と青谷上寺地遺跡出土水晶製玉類の法量比較(単位:mm)

遺跡	最大径		高さ	
	奈免羅	青谷上寺地	奈免羅	青谷上寺地
有稜Ⅱ式	3.4～4.6	3.0～4.68	4.2～6.4	3.99～5.53
有稜Ⅲ式	3.5	4.6～5.85	3.1	3.68～4.99
無稜Ⅲ式	3.3～3.5	2.82	3.1～3.4	2.9
有稜Ⅰb式	3.8～4.6	3.6	3.9～4.7	3.66

稜Ⅲ式の製作を青谷上寺地遺跡が担っており、現状では生産地より東側の八頭町八東川流域から京都府丹後市の竹野川流域に供給されていたと言える。

3. 奈免羅遺跡 SX3003出土水晶製玉類が持つ意義

(1) 他遺跡出土の水晶製玉類との比較

上述のとおり、奈免羅 SX3003からは水晶製玉類有稜Ⅱ式、有稜Ⅰb式、有稜Ⅲ式、無稜Ⅲ式の4型式がセットをなして42点出土している。

まず、有稜Ⅱ式は SX3003出土水晶製玉類42点中36点を占めている。同時期の資料として対馬市塔の首2号石棺出土品と唐津市天神ノ元 K-1 甕棺墓出土品があるが、これは最大径5mm、高さ6～8mmを測り、奈免羅遺跡出土品よりも縦長の形状をなし、青谷上寺地遺跡出土品との類似性も落ちることから山陰地域との関連性は想定しにくい。また、この有稜Ⅱ式は後期後半から終末期にかけては穿孔に鉄針を用いるが、山陰地域出土品は石針を用いている。

有稜Ⅰb式は3点出土した。同時期の資料として三坂神社墳墓群出土品の4点があるが最大径5.2～6mm、高さ5～5.7mmを測り奈免羅遺跡出土品より大きい。また、穿孔には4点のうち2点が石針を用いている。

有稜Ⅲ式は1点のみであり、同時期の資料として高松市太田原高洲遺跡出土品7点、三坂神社墳墓群出土品12点があるが、法量において奈免羅遺跡出土品が小さい。両遺跡出土品とも石針を用いて穿孔しており、奈免羅も同様である。

無稜Ⅲ式も1点のみであり、西日本全体で見ても出土点数が少ない。同時期の資料として鳥栖市内畑 SJ07甕棺墓出土品があるが最大径5～6mm、高さ5mmを測り、奈免羅遺跡出土品より大きく、なおかつ鉄針での穿孔を行っており、両者間に高い関連性は見出しがたい。

上記のように、奈免羅遺跡出土の水晶製玉類と類似し関係性を想定できる資料としては法量において奈免羅遺跡出土品とは違いを見せるものの、三坂神社墳墓群3号墓第10主体出土の有稜Ⅰb式4点と有稜Ⅲ式12点、太田原高洲遺跡主体部2-1出土品の有稜Ⅲ式7点が挙げられる。このうち太田原高洲遺跡主体部2-1出土品については、奈具岡遺跡での生産品である可能性が高いと考えられており(乗松2014)、奈免羅遺跡 SX3003出土品と三坂神社墳墓群3号墓第10主体出土品については形態・穿孔方法において共通性をうかがえる。

そして、製作地である青谷上寺地遺跡では奈免羅遺跡に供給したような有稜Ⅱ式の他に有稜Ⅲ式の完成品も出土している。この有稜Ⅲ式についても型式、法量、穿孔方法から三坂神社墳墓群3号墓第10主体部出土品⁷との共通性が見られる。

(2) 奈具岡遺跡 SX3003出土水晶製玉類の意義

水晶製玉類は大賀が指摘しているように原産地について特定の場所が存在するか現時点では不明であることから(大賀2011)、碧玉・緑色凝灰岩製管玉、翡翠製勾玉等のように原産地の確定を基にして生産地と供給先の関係性を把握することが難しい。

そのような意味で奈具岡遺跡の調査によって水晶製玉類の生産遺跡が日本海側にあることと地域性を持つ製作技法の存在が知られ(野島・河野2001、河野2000・2006)、その成果を基に

太田原高洲遺跡主体部2-1出土品が奈具岡遺跡産である可能性を指摘(乗松2014)したことは重要であろう。

そのほかに水晶製玉類の製作地やその流通範囲に対する言及として、河村好光は本稿での有稜Ⅲ式について製作地を丹後・山陰・北陸、流通範囲を山陰から近畿およびそれ以東の地域に、有稜Ⅱ式は流通範囲を北部九州から瀬戸内としたが、製作地が特定できないことから北部九州を中心とした地域での単独製作とみた(河村2010)。

また、谷澤亜里は北九州市城野遺跡出土水晶製玉類に対する分析を通して、大賀分類のC類(本稿での有稜Ⅰa有稜Ⅱ、無稜Ⅱ)の生産地として城野遺跡を評価している(谷澤2012)。

これまで山陰地域では弥生時代の水晶製玉類製作工房が多く見られるものの、山陰地域における消費先としての墳墓副葬品は現状で奈免羅遺跡 SX3003出土品42点が唯一である。42点のうち8割以上を占める有稜Ⅱ式は奈免羅遺跡から直線距離で20kmほど離れた青谷上寺地遺跡での製作が想定できることは上述のとおりである。また、北近畿の三坂神社墳墓群3号墓第10主体部出土品のうち有稜Ⅲ式も青谷上寺地遺跡での製作品と考えられ、青谷上寺地遺跡からの直線距離が約100km離れた地域まで流通していたことが分かる。

弥生時代後期前半において水晶製玉類の製作は複数の拠点的な集落(青谷上寺地、奈具岡)において実施され、青谷上寺地遺跡での製作品は日本海側に沿って竹野川流域まで、奈具岡遺跡での製作品は山間地域を越えて瀬戸内海地域に流通したと考えられる。一元的な製作・供給ではなく、複数の遺跡での製作・供給網が存在していた可能性を指摘できよう。

まとめ

以上で、鳥取県八頭町の奈免羅遺跡 SX3003から出土した水晶製玉類について、時期比定と生産地・流通先に関わる問題について述べたが、最後にその内容を整理してまとめとしたい。

まず、奈免羅遺跡では埋葬遺構としての構造や規模において、他遺跡の埋葬遺構とは異なる突出性は見られないが、一遺構への副葬量としては日本列島で現時点において最多となる42点が出土しており、水晶製玉類のみの副葬は「水晶のみの連珠」を想定できる。

出土した水晶製玉類は有稜Ⅱ式、有稜Ⅰb式、有稜Ⅲ式、無稜Ⅲ式という4つの型式がセットをなしており、いずれの型式も後期前半に出現するものである⁸。そして、法量と穿孔方法の類似性・共通性から青谷上寺地遺跡を製作地として想定した。また、奈免羅遺跡 SX3003出土品と共通するものが三坂神社墳墓群で確認されていることから、製作品の流通先が八頭町八東川流域から京都府京丹後市の竹野川流域にあると想定した。

上記のことから奈免羅遺跡 SX3003出土の水晶製玉類は弥生時代後期前半における水晶製玉類の製作と流通について、複数遺跡における製作・供給網の存在の一端を明らかにすることができる資料といえる。

今回は遺物を中心に検討したが、一墓地内において水晶製玉類が出土する埋葬遺構とそうでない遺構の間に埋葬主体部の構造や規模、各種副葬品の組合せに違いがあるのか等、墓地構成の側面からの詳細な検討も必要になる。これらの点については別途考察を行う予定である。

【謝辞】

謝辞：資料調査や文献収集、論文執筆時にご協力、有益なご助言をしていただいた下記の方々
に末尾ながら感謝いたします。また、本稿に対して適切かつ有意義なコメントを下された査読
者にもお礼申し上げます。

岩本崇、会下和宏、酒井雅代、寺前直人、田中義之、谷澤亜里、深田浩、松本岩雄、湯村功、
米田克彦(敬称略)

本稿は、島根大学法文学部山陰研究センター山陰研究プロジェクト「既掘考古資料の集成検討
および一括資料群の再検討による山陰地域社会の動態的研究」(2022～2024年度、代表・平郡
達哉)による研究成果の一部である。

付記：各章の執筆分担は、はじめに・1章・3章・まとめを平郡、2章を建神が草稿を執筆し
た後、相互が加筆修正し、最終的に両名で全体を調整した。

【参考文献】

【論文】

大賀克彦2001「弥生時代における管玉の流通」『考古学雑誌』86-4、日本考古学会

大賀克彦2002「弥生・古墳時代の玉」『考古資料大観』第9巻、小学館

大賀克彦2005「弥生時代における山陰系玉類の流通」『玉文化』第2号、日本玉文化研究会

大賀克彦2009「第2章 山陰系玉類の基礎的研究」『出雲玉作の特質に関する研究－古代出雲における玉
作の研究Ⅲ－』、島根県古代文化センター

大賀克彦2011「六 弥生時代における玉類の生産と流通」甲元眞之・寺沢薫編『講座日本の考古学5
弥生時代』(上)、青木書店

河野一隆2000「水晶製玉作と階層性－奈良岡遺跡を中心に－」『季刊考古学・別冊10 丹後の弥生王墓と
巨大古墳』雄山閣

河野一隆2006「水晶製玉類の生産と流通」『季刊考古学』第94号、雄山閣

河野一隆・野島永2003「弥生時代水晶製玉作りの展開をめぐって」『京都府埋蔵文化財情報』第88号、京
都府埋蔵文化財調査研究センター

河村好光1992「攻玉技術の革新と出雲の玉づくり」『島根考古学会誌』第9集、島根考古学会

河村好光2010「第2章 玉づくりの定着と文化圏連鎖」『倭の玉器－玉づくりと倭国の時代－』、青木書店

高橋進一2002「水晶製玉類の製作について」『環瀬戸内海の考古学』、古代吉備研究会

谷澤亜里2012「第1節 城野遺跡の玉作」『城野遺跡』北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室

谷澤亜里2020『玉からみた古墳時代の開始と社会変革』同成社

野島永・河野一隆2001「玉と鉄－弥生時代玉作り技術と交易－」『古代文化』第53巻第4号、財団法人古
代学協会 37-51

乗松真也2014「水晶製算盤玉の搬入」『太田原高州遺跡1』香川県教育委員会

平郡達哉・建神結香子2020「弥生時代西日本における副葬水晶製玉類について」『山陰研究』13

湯村功2017「西高江遺跡－弥生時代中期後葉の水晶製玉類の玉作工房－」『新鳥取県史 考古1 旧石

器・縄文・弥生時代』鳥取県

湯村功2017「奈免羅・西の前遺跡、上野遺跡」『新鳥取県史 資料編：考古1』鳥取県立公文書館県史編さん室

【報告書】

大宮町教育委員会1998『三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群・有明古墳群・有明横穴群』京都府大宮町文化財調査報告書第14集

香川県教育委員会2014『太田原高州遺跡1』県道太田上町志度線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

鳥取県2020『青谷上寺地遺跡15 第17次発掘調査報告書(第1分冊本文編)』

鳥取県埋蔵文化財センター2013『玉・玉関連資料／鳥取県埋蔵文化財センター編集』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告52、青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告9

船岡町教育委員会1986『奈免羅・西の前遺跡』

八頭町教育委員会・株式会社島田組2010『奈免羅・西の前遺跡Ⅱ』八頭町文化財調査報告書5

八頭町教育委員会・安西工業株式会社2011『上野遺跡Ⅰ 奈免羅・西の前遺跡Ⅲ』八頭町文化財調査報告書6

八頭町教育委員会・株式会社アコード2012『上野遺跡Ⅱ 奈免羅・西の前遺跡Ⅳ』八頭町文化財調査報告書10

¹ 奈免羅遺跡出土資料についてご教示いただいた米田克彦氏に感謝いたします。

² 掘方に板材を立てた痕跡が見られず、土壌隅の立ち上がり丸くなっている点から「舟形木棺の可能性を考慮」している(八頭町教委・島田組2010)。

³ 大賀克彦による一連の弥生時代における玉類の生産と流通に関する研究において、地域・集団ごとに素材獲得から生産にいたる過程で「系譜的に関係を持つ工人集団が同様な特徴を示す玉類の製作を継承」した様相を示す概念として「系」を用いて分類を行っている(大賀2001・2002・2005・2009等)。特定の原材料を用いて特定の形状の物品を作り出す工人集団の存在と生産された玉類の流通を考える上で非常に有効な概念と考える。水晶製玉類の場合、大賀が指摘しているように特定の原産地が明確になっていない現状では「系」の設定に至っていないため(大賀2011)、本稿では形状・法量との近似性と穿孔技術(石針・鉄針)に注目した分類を行った後、消費地となる墳墓での副葬品とこれに対応する生産地遺跡出土品の探索を行うこととする。

⁴ 前稿では西日本弥生時代墳墓出土の水晶製玉類を「稜の有無」と「最大径と高さの比率」を基に6型式に分けた(平郡・建神2020)。各型式の詳細については前稿を参照されたい。

⁵ 報告書には「完成品が透明であるのに対して、これらは曇った半透明である」ことから、図4-3の1~4・9について算盤玉の未成品と見ている(鳥取県2020、295頁)。他遺跡の墳墓副葬品の中には小型の算盤玉で透明度の低い、あるいは曇った半透明の製品も見られる。形態的にも墳墓副葬品に見られるものであるため、筆者達はこれらの資料について完成品と判断した。

⁶ 前稿で述べたように、青谷上寺地遺跡第17次で出土した水晶製玉類のうち有稜Ⅲ式については三坂神社墳墓群3号墓第10主体出土品と型式、法量、穿孔方法において類似性が高いことから、青谷上寺地遺跡で生産された可能性が高いと考える(平郡・建神2020)。

⁷ この遺構では埋葬主体部である木棺の構造や規模においては同一墓地内の他のものと大きな違いは見られない。しかし、副葬品のセット関係の質と量では突出しており集団墓地内において卓越性を見せ

る墳墓の副葬品に水晶製玉類が含まれていることが分かる(大宮町教育委員会1998)。同時期の副葬水晶製玉類において地域によっては墓地内で卓越性を持たない場合と卓越性を持つ場合があるが、本稿ではその意義まで言及できなかつた。今後の課題としたい。

- ⁸ 前稿では有稜Ⅲ式が中期後葉の福岡市吉武樋渡1号木棺墓から出土するとしたが、この資料について共伴する管玉やガラス小玉から古墳時代前期後半以降の可能性がある点、谷澤亜里氏から教示を受けた。有稜Ⅲ式の出現時期については再検討したい。ただ、中四国地域における出土は後期前半からになる。

Examines of the crystal beads excavated from SX3003, Namera Site

HIRAGORI Tatsuya*・TATEGAMI Yukako**

(*Faculty of Law and Literature, Simane University)

(**Culture Sports Department, Matsue City)

[A b s t r a c t]

This paper examines the chronology and production sites of crystal beads excavated from SX3003, Namera Site, Yazu Town, Tottori Prefecture, among the crystal beads from the burial sites in western Japan during the Yayoi period. Based on the comparison with the type classification and production techniques described in the previous paper, we propose the possibility that the crystal beads were produced in the first half of the Late Period, and further assume the Aoya Kamijichi site as the production site, based on the size of crystal beads and the drilling method. The crystal beads excavated from SX3003 at the Namera site are, therefore, an indication of the existence of a production and distribution network for crystal beads in the first half of the Late Yayoi Period.

Keywords: Yayoi Period, Eastern Tottori, Namera Site, Crystal beads, distribution